

ムトスとムズの表現性

——院政・鎌倉の片仮名文資料を中心に——

田 中 雅 和

はじめに

ムトスとムズとは同義語として捉えられることが多かったようである。しかし、全く同一の意味・機能で形の異なる二語（形）が共存することは、一般的には、考え難い。従って、ムズもム・ムトスとは異なる用法や表現価値等を持つことよって存在していたと考えられる。これまでも諸先学によって、ムトスとムズとの成立や両者間にある基本的な異同は論じられてきた。特に文体的・時代的な特徴や相違については共時的にも通時的にも考察が加えられてきており、その変遷などについても明らかにされてきた部分が多い。¹⁾

ムズの性格を考える場合、従来行われてきたように、ムトスと對比しながら見ることが有効であると考えられる。これまでも両者間の相違は検討されてきたが、本稿では先学の成果を踏まえながら、従来の捉え方だけで充分であったかどうか、改めてムトスとムズと

の表現性の異同、特にムズの表現性の特徴について、今までとは異なった視点で検討・考察を加えようと思う。

調査対象には、院政・鎌倉の片仮名文（広義の和漢混淆文を代表させる）資料を主に用いるが、そのことの意味は次の通りである。まず、ムトスとムズとの間に意味の差異があると指摘されたのは平安前期の和文における用例であって、後半期には同義に近くなっていると考えられる（それ以外にも、用いられる場面や文体の違いはしばしば指摘されてきた）。和文における両者間の差異やムズの特質と、和漢混淆文におけるそれとを、全く同一の性格のものとして捉えてよいかどうかは、問い直してみる価値があるように思う。これは、論者がこれまでの考察を通して、所謂付属語（助詞・助動詞）の意味・用法は和文における場合と和漢混淆文における場合とは異なり、和漢混淆文の方にはより本質的な部分が現れ易いと考えていることに基づくものである。²⁾次に、ムズ（ウス）が中世の口語を特徴付け

る語であることから、主にキリシタン資料・抄物・狂言台本等を通じて、その特徴が様々に論じられ、その中でベシとの類似性なども指摘されてきた。⁵⁾しかし、院政・鎌倉の和漢混淆文におけるムトスとの断続関係等に関する検討は、必ずしも充分でないように思われる。ムズの成立はムトスと密接に関係したと認められるので、ムトスの意味・機能との連続性なり、断絶（或はムトスからムズへの変遷）⁶⁾なりが指摘し得ると考えるのである。従来、両者の異質性については多く触れられてきたが、同質性に着目して論じられることはあまりなかったように思われる。また、ムトスは漢文訓読によって初めて行われた語法ではないが、和文よりも訓読系の文体中で積極的に用いられ、漢文訓読とより密接な関係を持つものであったと認め得る。従って、和漢混淆文における意味・機能を検討することは、ムズの本質的な性格を明らかにする上で、有効かつ重要であると考えるのである。

一、ムズの意志表現（対他的意志）

ムズを口頭語（口語調）としムトスを文章語（文語調）とする評価は、既にはぼ定着したかの観がある。更に、先学の論考を通じて特徴的なものとして、ムズの元来の意味は「意志」で表現主体の情意的・主観的表現であるのに対し、ムトスは「意志に基づく動作」を描写する客観的表現であるとする指摘が注目される。そこでまず、

ムトスとムズがそれぞれの程度「意志」表現に用いられているか、また、地の文・思惟文・会話文のいずれに出現するかを確認したのが表Iである。助動詞「ム」との比較から明らかになるムトスとムズの特性もあると考えるので、参考のためにムの用例を付した。更に、「ムトス」⁶⁾については、漢字交り文におけるムトスとムト為との表記の違いは意味・用法の相違をも反映すると考えられるので、表記によって区別した。

表Iに看取できるように、和漢混淆文のムズも口頭語（口語調）の文体を特徴付ける語と見てよい。また、使用状況の全体を見ると、「意志に基づく動作」を描写する客観的表現に専ら用いられるという特徴的意味・機能を明確に有していると認められるのはムト為表記の方である。即ち、ムト為は第三者の「意志」を客観的に描写するために用いられたもので、「ム」とは異質な語「ムトス」の原義を直接反映した表記と考えられる。それに対してムトス表記の方は、表Iに見る限り、ムとの特徴的な差異を認め得ない。この差は「ス」が、動詞の意味を（実質概念は欠き乍も人の動作・状態を描写するという意味において）未だ有していたか、形骸化していたか、或はそれらの程度の相違であろう。ムトスの場合、動詞「ス」は既に形骸化して実質の意味を持たず、ムトス全体が一語相当の資格で機能し、意味・用法もムに近くなって見ることができようか。一方、ムズは「意志」表現に用いられる割合が極めて低いことがその

ムズ		ムトス		ムト為		ム		表I			
その他	意志	その他	意志	その他	意志	その他	意志	全用例			
7	0	11	41	5	120	153	204	地	の	文	1
3	0	11	0	0	7	98	113	思	惟	文	1
5	0	76	36	6	33	488	510	会	話	文	10
10	3	14	29	24	121	288	315	地	の	文	11
13	4	11	0	0	9	131	99	思	惟	文	1
16	5	48	22	11	35	474	377	会	話	文	20
18	3	3	45	3	96	349	212	地	の	文	22
37	9	10	2	1	8	181	94	思	惟	文	1
46	15	29	26	3	53	521	473	会	話	文	31
35	6	28	115	32	337	790	731	地	の	文	今
53	13	32	2	1	24	410	306	思	惟	文	昔
67	20	153	84	20	121	1483	1441	会	話	文	計
2	0	1	2	0	0	10	0	地	の	文	打
1	0	0	0	0	0	8	19	思	惟	文	聞
1	2	0	1	0	0	17	17	会	話	文	集
1	0	3	4	0	0	57	8	地	の	文	聞
0	0	0	0	0	0	20	32	思	惟	文	書
0	0	2	1	0	0	37	36	会	話	文	抄
0	0	0	7	0	0	7	7	地	の	文	指
0	0	0	0	0	0	1	1	思	惟	文	婦
0	0	0	0	0	0	4	8	会	話	文	注
0	0	0	4	0	0	1	1	地	の	文	明
3	0	0	0	0	0	6	5	思	惟	文	恵
0	0	0	0	0	0	1	4	会	話	文	夢
0	0	0	0	0	0	0	1	地	の	文	却
0	0	0	1	0	0	2	6	思	惟	文	廃
11	4	0	2	0	0	14	5	会	話	文	忘
0	0	0	0	0	0	0	0	地	の	文	聴
1	0	0	0	0	0	0	4	思	惟	文	集
5	1	0	2	0	0	35	19	会	話	文	記
0	1	3	16	0	0	84	42	地	の	文	三
0	0	0	0	0	0	14	34	思	惟	文	宝
0	1	4	7	3	2	104	114	会	話	文	絵
38	7	35	148	32	337	949	790	地	の	文	合
58	13	32	3	1	24	461	407	思	惟	文	
84	28	159	97	23	123	1695	1644	会	話	文	計
180	48	226	248	56	484	3105	2841	総計			

ムズ		ムトス		ムト為		ム		表II 〈意志〉 の用例			
他	自	他	自	他	自	他	自				
者	身	者	身	者	身	者	身				
0	0	41	0	120	0	204	0	地	の	文	1
0	0	0	0	5	2	8	105	思	惟	文	1
0	0	22	14	22	11	109	401	会	話	文	10
3	0	29	0	121	0	315	0	地	の	文	11
4	0	0	0	6	3	10	89	思	惟	文	1
1	4	9	13	16	19	68	390	会	話	文	20
3	0	45	0	96	0	212	0	地	の	文	22
7	2	2	0	5	3	24	70	思	惟	文	1
3	12	16	10	36	17	60	413	会	話	文	31
6	0	115	0	337	0	731	0	地	の	文	今
11	2	2	0	16	8	42	264	思	惟	文	昔
4	16	47	37	74	47	237	1204	会	話	文	計
0	0	2	0	0	0	0	0	地	の	文	打
0	0	0	0	0	0	0	19	思	惟	文	聞
0	2	0	1	0	0	0	17	会	話	文	集
0	0	4	0	0	0	8	0	地	の	文	聞
0	0	0	0	0	0	4	28	思	惟	文	書
0	0	0	1	0	0	6	30	会	話	文	抄
0	0	7	0	0	0	7	0	地	の	文	指
0	0	0	0	0	0	0	1	思	惟	文	帰
0	0	0	0	0	0	0	8	会	話	文	注
0	0	4	0	0	0	1	0	地	の	文	明
0	0	0	0	0	0	0	5	思	惟	文	恵
0	0	0	0	0	0	0	4	会	話	文	夢
0	0	0	0	0	0	1	0	地	の	文	却
0	0	1	0	0	0	2	4	思	惟	文	廢
0	4	1	1	0	0	1	4	会	話	文	忘
0	0	0	0	0	0	0	0	地	の	文	聽
0	0	0	0	0	0	2	2	思	惟	文	集
1	0	2	0	0	0	16	3	会	話	文	記
1	0	16	0	0	0	42	0	地	の	文	三
0	0	0	0	0	0	5	29	思	惟	文	宝
1	0	2	5	1	1	11	103	会	話	文	絵
7	0	148	0	337	0	790	0	地	の	文	合
11	2	3	0	16	8	55	352	思	惟	文	
6	22	52	45	75	48	271	1373	会	話	文	計
24	24	203	45	428	56	1116	1725	總	計		

特徴として指摘できる。特に今昔物語集の天竺・震旦部が象徴するように、漢文訓読色の強い文体ほどその特徴が際立っている。少なくとも訓読系（和漢混濁文も含む）の文体においては、ムズの本来の意味が直接「へ意志」に結びつくとは考え難い。ムズについては、「ム」や「ムトス」との対比上の特異性を、主に意志表現以外の用法の部分で發揮していたとも考えられそうである。

表Iに見る限りでは、ムズとムト為・ムトスとは異質であるように見える。しかし、もう少し詳しく「へ意志」の用法に注目して分析することで進う側面が見えてくる。そこで、意志表現に用いられた場合、それが「表現主体自身の意志」にかかわる表現か、「他者の意志」にかかわる表現かを区別したのが、表IIである。意志表現に用いられたムト為・ムトスは、ムとの対比において、表現主体以外の人物の意志を表現するのに用いられるという特徴的な偏りが確認できる。表Iでは、ムトスの方がより「ス」の形骸化を進めているのに、ムト為に比して、意志以外の用法も多く、助動詞ムとの相違が明瞭に現出していない。しかし、意志表現に用いられたものに限ると、ムとの違いは歴然としており、ムトスもムト為と同様に表現主体自身の意志表現に用いられるものが極めて少ない傾向にあることが判る。即ち、ムト為・ムトスともに、第三者の「へ意志」に基づく動作を客観的に描写する表現法であり、「ムトス」の原義を反映したものとイえる。一方、ムズには用例の数値だけを問題にすると、

そこから見てくる特徴がない。しかし、その内容（意味・用法）に及んで検討すると、極めて特徴的な「対他」的意志表現とも言えそうな性質が認められる。これはムト為・ムトスが表現主体自身の意志表現に用いられた場合にも、ある程度共通する性質である。ムズが表現主体自身の意志表現に用いられた二四例を見ると、凡そ次の三種に分けることができる。

第一に、意志（に基づく動作）が他者に向けられ、「（某の為に・某に対して）してやろう」の意になる点において「対他」的表現といえる次の如き例である。

○夢ユメ此コノ後ノ方ヲ老ナシ僧ノ来リ告テ云ク「汝ニ種チ糸ヲ惜シ夫ハハスト思呼ビ遣ヒ明日ニ此ニ可レ来ル然レ其ノ来ル人ニ云フム事ニ可隨ル」ト云フ見ル 〔今昔 卷一六〕

○殿ノ被レ仰ル様ニ「汝ニ今日ノ内ニ我家ニ行キ着テ（略）イハ若シ今日ノ内ニ行キ着テ不レ云フ辛ク目ヲ見セルハナクト被レ仰ル也 〔今昔 卷二六〕

○「今コノ見エ不レ奉ル候ニ若シ去リ給フ時ニ必ズ見エ奉ル候ニ不レ然ラズ限リ影ノ如ク副ト奉ル候ハムストト云フ立テ去リ 〔今昔 卷二九〕

○又レ真言心サシコトニアラハ大日経ノ疏ハシモヨマセンスル也 〔却廢忘記 上巻〕

それぞれ「夫を添わせてやろう」「辛い目にあわせてやろう」「お会い申し上げましょう…添ってお仕え致しますよう」「読ませてやろう」の意であろう。いずれも、意志（に基づく動作）が、他者とは

無關係に遂行されたり個人的であつたり、或は一方向的に意志を表明するにとどまるような、いわば内向性のものではなく、他者との関わりを持ち或は他者を対象とする行為を伴うような外に現れる動作を表現するものであり、いわば外向性の意志表現であることが判る。ムズによる意志表現の過半数がこの用法で、意志表現のムズを特徴付ける。

また斯かる表現はその性質から、前掲の用例にも見られるように、意志（に基づく動作）が他者に働きかけられることになるものもある。前者とはニュアンスを少し異にするが、意志に基づく動作が他者に働きかけられるという意味において、これも同様に「対他」的表現といえるものである。他者に行為の影響が及ぶ意志として表明され、働きかけの対象者が必要とする次の如き例である。

○守其レニ立テ「有^レ菟^ノ子共^ハ」ト問^レ取^ル者共各小舎人童^ヲ抱^キ持来^リ守^リ「此^レ暫^ク這^キ見^ス」ト云^キ乞取^リ

〔今昔 卷二九〕

○娘夫^ノ兵衛^佐「(略)官仕^ハ何^カ見^テ御^マ只何^カ吉^ク様^ニ成^リ給^ハ」ト云^キ男糸惜^ヲ「何^カ見^テ弄^ル」ト云^キ尚棲^レ

〔今昔 卷三〇〕

第二には、自らの意志を他者に問いかけたり訴えたりするという意味において「対他」的表現といえるものがある。表現の質からいうと意志表現として扱うことに問題もあるかも知れないが、表現主体の意志に基づく動作のあり様を「どうしよう」と問うものと捉え

たい。ムズが疑問詞を伴って表現主体自身の意志（に基づく動作）を表す場合、会話文以外には用いられない。対話の中で相手を意識した表現でしか用いられないのである。次の如き例が分類される。

○君答^テ宣^フ「鷹^ノ仕^ハ間^ニ此^レ雨風^ニ合^テ可行^キ方^ニ不^レ思^フ只馬^ノ向^キ方^ニ任^セ走^ル程^ニ家^ノ見^レ喜^ビ此^レ来^ル也何^カ」ト

〔今昔 卷二二〕

○シノビテ祖^ノ室^ニマウテム「カムル事^{コソ}アレイカムセムスル若^ク聞^キ給^ヒタル事ヤアル」ト云^キ

〔打聞集〕

○「此^レ度^ハイミシキ事アリ」ト「エ思^フ得^シ」トオホシ食^テ「何^セムスル今度^ハ更^ニエ思^フユマシキ事」ナド仰^ル

〔打聞集〕

第三は、自らの意志（に基づく動作）ではあるが、それを第三者的に表現し、他者に説明するという意味で「対他」的表現になるものである。地の文で第三者の意志に基づく動作が語られる用法と同じように、自らの意志（に基づく動作）を客観的に「語る」のである。単なる一方的・個人的な意志の表明ではなく、「するつもりなので」のような条件・情況の説明や、行為の意図を問われたときに「するつもりだ」と説明するような用法である。次の如き例が分類される。

○「此^レ年来^ハ倡^リ水^{有^リ}思^フ渡^ラ不^レ思^フ係^ス此^ノ人^{具^シ}行^カト云^ハ明日^ハ不^レ知^ス随^ッ行^キ形^{見^ニ}為^ル」ト泣^キ取^リ

〔今昔 卷一六〕

ムトスには三例しかない。この表現は、表現主体の意志に基づく動作のあり様を問題とするものであり、意志を外に表す即ち実行に移すことのあり様にかかわる動作性の強いものであるといえる。従つて、動詞「ス（為）」の意義をより強く残したムト為の方に集中する結果になったものと見られる。両者間に有意的な偏りが認められる。

○二人童形ニ成レ敷ク云ク「我等此醫師ノ為ニ被傷レムトス何カ可為ク何所ニカ述ケト為ル」ト云フニ
〔今昔 卷一〇〕

○主人此ノ男ニ云ク「此柑子ノ喜マハ可云尽ク無レト此旅ニテハ何ニカ為ル只此ハ志ノ初ヲ許リ見ル也（略）」
〔今昔 卷一六〕

○主ノ〔略〕此浪ノ見始ル時ハ百丈許見ル近成マ浪ノ長コソ劣ニ既ニ近ラ成ル何カト為ル」ト云フ
〔今昔 卷二六〕

○郎等共ハ…〔略〕今日一日行キ浅方廻リ尋テ只今ハ底ヘ可下様敢テ無ク何カト為ル」ト云フ
〔今昔 卷二八〕

○「我既ニ汝子ノ懷妊ニ還来ル程何カ為ル」ト云フ
〔今昔 卷五〕

○「我弟形勝レ父母美ニ悲ニ給ヒル何ニ依ル共ニ出ル身ヲ捨テ独リ不返ル父母問ヒ給ヒ我等何カ答ハト云フ」ト云フ呼ビ泣ク
〔三宝絵詞 上巻〕

○「ケサ師ノ僧ツムカナクシテ俄ニオハリタリ。マツハヤノレ一人シテイカサマニテヲサメタテマツラムトスラム。次ニ師ノ飯ニカムリ給ヘル母イカニシテイキ給タラムトスラム」ト云フ
〔今昔 卷一〇〕

〔三宝絵詞 中巻〕

次にムト為・ムトスは、地の文で第三者の意志に基づく動作を客観的に描写するのが本質的用法であつたように、表現主体自身の意志についても、それを客観的に表現・説明しながら語るために用いられる。動詞「ス」の機能を色濃く残した最も基本的で特徴的な用法といえる。ムト為で約四割、ムトスで約三割を占める。

○正法藏ニ宣ハク「我レ年来病有ク苦シ所多シ此身ヲ弃テ為ス時夜ノ夢中ニ天子来ル」ト云フ
〔今昔 卷六〕

○夢ニ母来テ告テ云ク「我レ悪業ノ故ニ依テ鹿ノ身受テ狩我レ既ニ命終ニ多ク射手ノ中ニ迷テ通ル為ル汝ノ弓箭道ニ極ニ依テ」ト云フ
〔今昔 卷一九〕

○「我等先ツ汝家ニ行ク問フ彼津ニ行テ求テ得ル其所ニ即チ捕テ為ス四王ノ使ト云フ者来テ語テ云ク」ト云フ
〔今昔 卷二〇〕

○鑄師ヲ以テ鐘ヲ鑄セ鐘ヲ鑄ケル鑄カ云ク「此ノ鐘ヲ槌ラ人モ無ク一ニ二ニ時ニ鳴ル為ル也其レ此鑄後土ニ堀埋テ三年可ク令ヘ有也」ト云フ
〔今昔 卷三一〕

○其答ヲ謝シ云ク「我レ汝徳ヲ不知ク愚ク汝ヲ罰ス願ヒ此ノ答ヲ免ス給ヒ」ト云フ
〔今昔 卷二二〕

○〔略〕其人ノ姓ハ何ノ名ヲ何カ云フ何ノ洲ニ有ル人ト問フ問ニ絶入ル」ト云フ
〔今昔 卷一〇〕

○船ノ方ヲ見ハ亀五頭ヲ捧テ有リ錢以人立留リソハ何亀ト」ト云フ問フ
〔今昔 卷一〇〕

「書物ニセムトスル也」ト云ハ錢以人「其龜ハ」ト云、

〔打聞集〕

○「タムウマレテハヘリシオリ一テイノミツヲエテハヘリシマム
ニノトヲウルフルハヘラス。河ヲミテノマムトスレハミナホム
ラニマカリナリス。マシテクヒモノハ名字ヲウケタマハラス」

〔法華百座聞書抄〕

○雪山童子ノ云、「此ノ身ハ後ニ遂ニ死ナタム一ツノ功德ヲ得今日ノ法
為ニきたなく穢ヲハシキ身ヲ捨テ後ニ仏ト成ル淨妙ナル身ヲ可得ツ土ノ器
捨テテ実ノ器ノ替フルカニセムトスル也」(略) 〔三宝絵詞 上巻〕

○使ノ鬼ノ云、「マツ汝ガ宅ニユキテ問ツルニアキナヒシニユキテイ
マタカヘラストイヒツレハ津ニユキモトメエタル。ソコニシテ
即トラヘムトシツルヲ四天王使、イフ使、イフ物来ヲコノ人寺、
錢ヲウケテアキナヒテタテマツルヘシ。(略) 〔

〔三宝絵詞 中巻〕

表現主体自身の意志表現の用法から見る限り、ムト為とムトスも
ムズの三種の表現型のいずれかに分類できる場合が殆どで、(対他)
の意志表現に与るといふ基本的な共通の性質が認められる。殊に、
ムト為はムズと全く同じように三種の表現型だけで解釈することが
可能である。これらは助動詞「ム」との意味・機能の差異を、程度
の差こそあれ、動詞「ス」の意義を残すことによつて顕現し、ムと
は異なる表現価値を持つて存在し得ているものと捉えられる。そう

いう意味において、ムズはムト為・ムトスとの連続性を有し、三者
の根幹的な意味・用法をこの特徴的な(対他)的表現という点に認
めてよいように思ふ。その最も基本的で特徴的な部分を凝縮し、独
自の特異性として発揮し続けたのがムズであるように思われる。

因みに、ムトスには前三種表現型に収め得ない、次に示すような
例が約三割ある。表Iでも指摘したが、ムの意志(或は推量と解せ
るものもある)との特徴的な違いを明確にできない。他の場合と異
なり、スがあることの意義を見出せず、ムトス全体が一語相当の資
格で機能しているように思われる。また、それは総て文末に用いら
れた例である点が目される。

○仏ニ宣フ「我ハ只今滅度ヲ見ルヘシ永ク此ノ界ヲ隔テムトスル汝ガ我ヲ見ム
事只今也近ク来レ」ト宣フ 〔今昔 卷三〕

○「我レ此ノ寺ノ事勤ノ畢今ハ明後日ノ夕方帰ナム」ト云フ 〔今昔 卷二〕

○夢ニ僧有テ示シテ云フ「(略)其後ニ兜率天ノ内院ニ生レ慈氏尊ヲ見奉
ル」ト云フヲ見 〔今昔 卷一三〕

○入道ニ云フ「我レハ此ノ西ニ向テ阿弥陀仏ヲ呼ビ奉テ金ヲ叩答ヲ給ハム所
ヲ行ハム」(略) 〔今昔 卷一九〕

○「己ハ水ノ上ヘ入リテムトス其水ノ上ヨリ来ル物ヲ鬼ニテ神ニテ寄テ懐ク」ト云
置フ 〔今昔 卷二〇〕

ムズ		ムトス		ムト為		表III 〈意志〉 以外の 用例		
他	自	他	自	他	自			
者	身	者	身	者	身			
7	0	11	0	5	0	地	の文	1
1	2	5	6	0	0	思	惟文	1
5	0	41	35	5	1	会	話文	10
10	0	13	1	24	0	地	の文	11
11	2	3	8	0	0	思	惟文	1
13	3	19	29	5	6	会	話文	20
18	0	3	0	3	0	地	の文	22
35	2	3	7	0	1	思	惟文	1
37	9	20	9	1	2	会	話文	31
35	0	27	1	32	0	地	の文	今
47	6	11	21	0	1	思	惟文	昔
55	12	80	73	11	9	会	話文	計
2	0	1	0	0	0	地	の文	打
1	0	0	0	0	0	思	惟文	聞
1	0	0	0	0	0	会	話文	集
1	0	3	0	0	0	地	の文	聞
0	0	0	0	0	0	思	惟文	書
0	0	1	1	0	0	会	話文	抄
0	0	0	0	0	0	地	の文	指
0	0	0	0	0	0	思	惟文	婦
0	0	0	0	0	0	会	話文	注
0	0	0	0	0	0	地	の文	明
3	0	0	0	0	0	思	惟文	恵
0	0	0	0	0	0	会	話文	夢
0	0	0	0	0	0	地	の文	却
0	0	0	0	0	0	思	惟文	廃
10	1	0	0	0	0	会	話文	忘
0	0	0	0	0	0	地	の文	聴
1	0	0	0	0	0	思	惟文	集
5	0	0	0	0	0	会	話文	記
0	0	3	0	0	0	地	の文	三
0	0	0	0	0	0	思	惟文	宝
0	0	2	2	2	1	会	話文	絵
38	0	34	1	32	0	地	の文	合
52	6	11	21	0	1	思	惟文	
71	13	83	76	13	10	会	話文	計
161	19	128	98	45	11	総	計	

以上見てきたように、表現主体自身の意志表現に用いられたムズとムト為・ムトスの多くは三種の表現型のいずれかに分類することができる。その三種は、いずれも意志やその内容・行動が他者とは無関係の個人的なものであったり、一方的な意志表明にとどまったりするよるな、表現主体自身の内部に留まる（内向する）ものではなく、他者に向かつて表明したり、働きかけたりすることを目的とした〈対他〉的意志表現である点で共通する。殊にムズは、この様な特異性において助動詞「ム」と意味・機能上の分担を成し、「ム」にない用法や表現価値を持って存在していたものと考えられる。この特異性は、「ム」と異なり、未だムズが動詞「ス（為）」の意義を根底に含んでいたことの現れであり、そこに「ムトス」との連続性を認め得るのである。動詞「ス」は外に現れる動作を表現するのであるから、「ムトス」は「ム」に比して、客観性を増した対他的な（他者を意識した）表現になると見ることが出来る。表現主体自身の意志を表現する場合は、意志に基づいて対他的に行動して、みせることを意味し、対者に対するふるまいとしてその意志の内容を述べることが基本的用法と考えられる。従つて、意志を外に表す即ち実行に移すことの対他的な表明や描写になることが、「ムトス」の基底にある特異性と位置づけられる。ムズやムト為・ムトスが〈対他〉的（或は「他者に属すること」）の表現に与ることを特徴とすることは、意志表現（表Ⅱ）からだけでなく、意志以外の用法についてみた表Ⅲからも裏付けられる。

即ち、表Ⅱからは他者の意志を主に表すこと、表Ⅲからは意志以外の推量なども表現主体以外の他者に属することを表現するのに主に用いられることが判る。ムズとムト為・ムトスの本来的な表現性は、表Ⅰ・Ⅱ・Ⅲから明らかなように、表現主体以外の〈他者に属すること〉と把握されるものを表現することにあり、その延長上に、表現主体自身のことを他者との関係で把握し表現しようとする〈対他〉的意志表現という特徴的な性質が存したものと考えられる。ムズだけに關していえば、ムト為・ムトス以上に動作性（動詞「ス」の機能）は弱めながらも、なお〈対他〉的な意識の強い表現という方面の表現性を強めながら、「ム」などの他の推量の助動詞とは異質な表現価値を明確にしていたのであろう。

三、活用形から見た特徴

ムズについて、ムとの比較とムト為・ムトスとの連続性を中心に考察したので、次にムト為・ムトスとの差異を中心に検討し、ムズ独自の特異性や表現価値について更に考えてみたい。

まず、ムト為・ムトス・ムズの差異が明確になるのは、その出現の形（活用形）においてである。三者の出現状況を活用形によって分類すると表Ⅳのようになる。表Ⅳから看取できるように、ムズはムと同じ活用形でしか出現しない。これはムト為・ムトスの方が、ムズに比すると、未だ動詞「ス」の意義を残していた（ために各活

表IV 活 用 形 分 類 よ	1～10		11～20		22～31		今昔計		打開集		聞書抄		指帰注		明恵夢		却庵忘		聴集記		三宝絵		合計		
	意 志	そ の 他	意 志	そ の 他	意 志	そ の 他	意 志	そ の 他	意 志	そ の 他	意 志	そ の 他	意 志	そ の 他	意 志	そ の 他	意 志	そ の 他	意 志	そ の 他	意 志	そ の 他	意 志	そ の 他	
ト 為	未 然 形	3		2			5	0															5	0	
	連 用 形	2		1		4	7	0														1	7	1	
	終 止 形	6	1	5	1	1	12	3															12	3	
ト ス	連 体 形	144	10	148	34	145	6	437	50												2	2	439	52	
	已 然 形	5		9		7	21	0															21	0	
	命 令 形						0	0															0	0	
ト ス	未 然 形	1		1	1	5	7	1					1									2	1	11	2
	連 用 形	13	1	15		35	1	63	2		1											3	3	69	3
	終 止 形	60	94	33	72	19	39	112	205						4						3	4	122	210	
ト ス	連 体 形	3	2	1		10	1	14	3	2	1	3	3									14	2	38	9
	已 然 形		1	1		4	1	5	2	1	1											1	1	8	2
	命 令 形						0	0	0														0	0	
ト ス	未 然 形						0	0															0	0	
	連 用 形						0	0															0	0	
	終 止 形	6	2	18	1	42	3	66		2	1				2								4	74	
ト ス	連 体 形	9	9	21	25	55	34	85		2	2				1							2	4	41	99
	已 然 形		1		1	4	2	4															1	3	7
	命 令 形						0	0															0	0	

用形を完備している)と見得るのに対して、ムズは既に一語化してムと同じく「辞」的に用いられていたことの一つの現れであろう。

ムズにない未然形と連用形のムト為・ムトスは助動詞ム・キ・ケリ・ツ・タリや助詞テなどを下接する例である。

○仏説宣「汝善聴此翁鹿射思待立リ間俄虎来喰_ム」
為_シ時_ニ彈_ル師_ノ虎_ヲ難_ク免_ル為_シノ(略) [今昔 卷一]

○而_{シテ}唐_ニ渡_リ為_シ時_ニ先_ニ宇_ノ佐_ノ宮_ニ詣_テ「道_ノ間_ノ海_ノ怖_レ无_ク平_ニ渡_リ給_フ」祈_リ申_シ給_{ケル} [今昔 卷一]

○小僧出来云、「(略)此男、我、為、恩、施、者、也、海、人、為、被、引、捕、命、被、殺、男、慈、心、発、魚、買、取、命、助、(略)」 [今昔 卷一七]

○陶朱富人、見我、田、作、徳、付、セ、シ、カ、ト、モ、更、徳、ツ、カ、ス [三教指帰注]

○人、頸、キ、ラ、レ、ハ、ソ、レ、ニ、カ、ハ、リ、テ、頸、モ、キ、ラ、レ、テ、シ、ニ、ナ、ム、ト、セ、ン、ト、思、キ、テ、候、ヘ、ハ、イ、カ、サ、マ、ニ、モ、学、問、モ、ナ、ニ、モ、ソ、ノ、時、ハ、シ、サ、ム、ム、ス、ル、事、也 [却庵忘記 上卷]

○葬送_ノ時_ニ、仏末世_ノ衆生_ノ、父母_ノ養育_ノ、恩_ヲ不報_ス、事_ニ誠_シ給_フ、為_シ御棺_ノ荷_ヘ、為_シ給_フ時_ニ、大地震動_シ、世界不安_ス [今昔 卷二]

○アキイ子アリ、毒イトナツク、毒イトイフコトハセメテノ悪人ナリケレハムマレムトシケルニ毒ノフリケルニヨリテ毒イトハナツクルナリケリ [法華百座聞書抄]

○使_リ鬼_ノ云、「(略)津_ニユキモトメタルソコニシテ即_チト_ラヘムトシツルヲ四天王使_リイフ物来_リ」 [三宝絵詞 中卷]

○其本意ハ諸仏ハ衆生_ヲアハレム衆生諸仏_ヲ信ス(略)衆生ノ心_ヲヤハラケテ仏界ニヒカムトシタルナリ [光言句義釈集記]

右のムズにない未然形・連用形の用法においては、ムト為とムトスが未だ動詞「ス」の意義を残していることがより明確に特徴付けられる。就中、ムト為の「為(す)」は実質動詞としての性格を強く持ちながら機能していると認め得る。同様に仮名表記のムトスも、

助詞「トテ」を介する「ムトテス」の場合や複合動詞の形での動詞「ス」が実質の意味を持つて機能するのと同様に、一語化していない次の如き例もある。

○其_ノ預_カ云_フ「和尚_ハ早失給_ニ葬送_{セムトテス}ル処_ニ草鞋片足許_{アリテ}身_ヲ体_ハ无_クサレハ其由_ヲ啓_ルヘキ也」云々 [打聞集]

○又善妙寺ニ我力流_ハ多トマリテ候也中事トモソライタラテカマヘテタモタムトシアヒテオハシマスカ故也 [却庵忘記 上卷]

しかし、仮名表記ムトスの方は、ムト為に比して、その動作性がより稀薄になり、「ス」が実質の意味を失つて形式化したものもある。

○梵網經_ハ乃玉_ハハク「モシ国王_ノ位_ヲウケムトセン時_ニ、転輪王_ノ位_ヲウケム時_ニ百官_ヲマテ位_ヲウケム時_ニ、マツ菩薩_ヲ戒_ヲウクヘシ諸_ノ仏_ヲ悦_ビ給_フ」トイヘリ [三宝絵詞 下卷]

右例では、「位^レウケムトセン時」と後続の「位^レウケム時」二例との間に、有意的区別や意味・用法上の差異は認め難い。即ち、ムなどと同じく、ムトスが一語相当の資格で機能していると見なせるものもあるのである。

次に特徴的な偏在を認められるのが、終止形と連体形における三者の出現状況である。ムズの場合、連体形に多い点が特徴的である。就中、意志表現において顕著で、終止形の四例に対して、連体形は四一例を数える。しかも、終止形と同じく、連体形もその多くが文末に用いられたものであることが留意される。そのこの意味や特性については後で考察する。一方、ムト為・ムトスを見ると、その出現状況は一様でなく、両者が同一の意味・用法で全く同一の語の異表記であるとは考え難い程に、有意的な偏りのある分布を示すことが判る。即ち、ムト為が連体形に集中し（全体の九割）、ムトスが終止形に集中している（全体の七割）ことが特徴的な傾向として注目されるのである。この偏在がいかなる意味を持つかについては、下接語の種類と性質などを合わせて考察することによって明らかにする。

四、下接語から見た特徴

そこで、ムト為・ムトス・ムズの下接語を、活用形別に整理したのが次の一覧表である。

まず、ムト為の九割が集中する連体形の下接語を見ると、接続助詞「ニ・ヲ」や時を表す形式名詞「時・程・間」（多くが二を伴った接続助詞的用法）などが圧倒的多数を占めており、文中用法を中心とするという特徴的な傾向が看取できる。即ち、ムト為の特徴を、発言の途中で叙述を展開する連文機能を持つている点に認め得る。

連体形以外を合わせ見ても、五四〇例中の四一八例（約八割）が文中に用いられて、連文となっている。これも動詞「為（す）」がなお機能・意義上働き続けていることの現れと見ることが出来る。つまり、文中でムト為が（多く接続助詞等を伴って）用いられる表現型は、行為の継起や並列を表したり、後句に対して原因・理由或は目的や情況などを説明したりする為の型であり、いずれも（意志に基づく）動作を描写したものと見ることが出来るのである。

○馬^ヲ折返^{サシ}所^ニ无^シ馬^ヲ下^リト^ス為^ニ鑑^ノ下^ノ遙^ク谷^ニ有^レレハ可^ク下^ル所^ニ无^シ馬^少シ動^カ落^ル入^リト^ス谷^下ノ十^余丈許^ヲ下^リト^ス也見^ル目^ニ暗^クト^ス谷^底ニ不^見ト^ス東^西忘^レ魂^ヲ心^騒只^今馬^ト共^ニ死^スト^ス

〔今昔 卷一〕

○然^レ若^ク僧^寄来^テ男^懐搜^ハ為^シ男^思ハ我^カ懐^ニ刀^有定^テ搜^出ト^ス其^後ハ我^レ吉^事不^有然^レ我^身忽^ニ成^リ同^死此^老僧^取付^ト死^スト^ス

〔今昔 卷二〕

一方、ムトスの方は終止形に多く、しかもその殆ど（三三二例中の三三二例）が文末終止に用いられるという極めて特徴的な傾向が

ムト為・ムトス・ムズの下接語一覧

	ム ト 為	ム ト ス	ム ズ
未然形	助動詞 キ(5)	助動詞 ム(7) キ(6)	
連用形	補助動詞 給ふ(1) 助詞 テ(1) ケリ(2) ヅ(2)	連用中止(1) 補助動詞 給ふ(1) 助詞 テ(29) キ(1)・ケリ(29) ヅ(9)・タリ(1)	複合動詞(1)
終止形	文末終止(6) ト云へトモ(2) 助動詞 ラム(7)	文末終止(321) ト云へトモ(2) 助動詞 ラム(8)・ナリ(1)	文末終止(13) ト云トモ(1) 助動詞 ラム(64)
連体形	文末終止(61) 助動詞 事(12)・間(18)・程(34) 時(44)・期(1) カ(2)・ヲ(32)・ニ(199) ハ(1)・物ヲ(1) ヤ(1)・ゾ(14) カナ(1) 也(23)・ナリ(10) ト云へトモ(1)	文末終止(9) 助動詞 名詞(4) 形式名詞 時(7)・程(4)・アヒダ(1) 助詞 ニ(14)・ニハ(1)・ヲ(1) ハ(1) ゾ(1)	文末終止(20) 助動詞 名詞(22) 形式名詞 事(14)・様(4)・間(1)・程(2) 時(2) ガ(2)・ヲ(4)・ハ(1)・ニ(1) ニハ(2)・ニモ(1)・カハ(3) ゾ(13)・ヨソ(1)・カ(1) ニヤ(6)・ニカ(4)・ニコソ(3) カゾ(1)・カチ(3) 也(22)・ナリ(1) チメリ(6)
已然形	助詞 ハ(11)・トモ(10)	文末終止(1) 中止法(1) 助詞 ハ(6)・共(トモ)(2)	助詞 文末終止(6) ハ(4)

認められる。終止形以外の副詞や係助詞などをうけるもの（連体形や已然形など）も含め、単独で文末に位置するものが最も多いが、助動詞ケリ・ラム・ナリや助詞等を伴って文末に用いられるものもある。それらを合わせた全体を見ると、ムトスは七割強（74%）が文末用法である。即ち、ムトスは、発言の末尾で結論的に述べて文脈をひとたび止める機能、いわば言い納め機能を有した語ということができる。これは、動作性の「ス」が拡大して意味が広がり、文末の陳述を担うようになったと見ることができようか。その意味でも、文末のムトスは一語相当の資格で「辞」的に働く語と見ることができ。しかし、純粹の一語助動詞「ム」などとはその表現性を異にしている。それは、動詞「ス」がある程度形骸化し乍も、陳述を担うという点で、未だその機能を残しているためであると考えられる。（ムトスには婉曲の用法が無いのもそのことの一つの表れか。）つまり、ムトスは、文中で連文機能を持つムト為に比して、動詞「ス」の形骸化が一段と進み、一語化（助動詞化）の程度を強くしているが、「ム」と同質に扱えるほどには熟合しておらず、動詞「ス」の機能が陳述を担うという点で残り、専ら文末でその機能を發揮していたものと思われる。このように、文末に来ることが多い（文末用語といえる）という特徴が、ムトスの性格を象徴していると考えられる。これらのことから推測すると、中世以降「ムトス」は漸次動詞の意が薄れて助動詞化を強くして行くが、ムトス表記に

象徴されるように、それはまず文末に於いて陳述を担うことよって助動詞化するところから始まったのではないかと考えられる。

ところで、外形上は「ムトス」の異表記と見られるムト為とムトスとは、前述のように、その性質の総てを同じくするものではなく、表記の相違が意味・用法の相違を反映していると思われることができる。その解り易い具体的な例が、両者が同じような意味を有しながら、連続する文脈の中で出現する次のような場合にも確認できる。

○帝釈此ノ申所ノ事ヲ次第ニ具聞給ヒテ既ニ五衰現ニ死ニ為リ天人見給ヲ召宣フ様「汝、既ニ命終ニ彼大臣ノ子、成リ願ヲ滿テ」、

〔今昔 卷二〕

○身ニ重キ病ヲ受テ日来、経ヲ既ニ死ニ其時ニ此人ノ目ニ火ノ車見テ此レ見、後病人ニ一人ノ智リ有僧呼テ問テ云「我ニ年来（略）罪ヲ造テ事ノ不止ス今死ニ為リ時臨ミ目前火ノ車來テ我ヲ迎ヘ然レハ罪造テ者地獄ニ墮ツト云フ事ハ実ニ」

〔今昔 卷一五〕

右例は共に意志性のない表現である。ムトスとムト為との相違は、意味の違いに基づくのではなく、文末に用いるか文中に用いるかという用法上の違いに基づくものと考えられる。特に「既ニ死ニ其時ニ」（断止）と「今死ニ為リ時ニ」（連続）との関係などは、その典型的な姿である。ムト為が連文機能に関わる表記形態であることは、次の如き例も亦左証となる。

○其ノ家ノ主ノ物ノ酒ヲ造テ其人ノ員ヲ増テ得テ為リ其時ニ班テ小

牛出来^{ウシ}薬王寺^{ヤクワジヤウジ}内^{ウチ}入^イ常^{ジョウ}塔^{トウ}本^{ホン}臥^イ臥^イ

〔今昔 卷二〇〕

助詞「ニ」と「其時」^ニとが、同じ意味・機能を持つにも拘わらず、重複して用いられ「ムト為ルニ」となるのは、ムト為が連文の表記形態であったことの現れであろう。また一方では、〈任意志〉に基づく動作の描写かそれ以外か、或は地の文か会話文や思惟文かなどを基準に使い分けられたようにも見える次の如き例もあるが、しかし、それらの基準は、既に述べたように、ムトスとムト為との間の相違を特徴付けるものではない。この場合もやはり、文の断続関係が用法上の優先的な基準として両者の相違を特徴付けている。

○彼^カ從者^{ジョウ}竊^ニ寄^キ刀^ト以^テ大安^ト頭^{カウ}刺^ス洞^ク略^ニ其時^ニ大安^ト驚^ス悟^ル從者^{ジョウ}呼^フ從者^{ジョウ}寄^キ此^レ見^テ刀^ヲ拔^キ為^ル死^ニ略^ニ其時^ニ大安^ト驚^ス悟^ル

〔今昔 卷六〕

○母^{ハハ}女^メ告^グ云^ク略^ニ家^カ婦^ト為^ル強^ニ尚^ニ我^レ打^ツ然^レ我^レ走^リ來^ル汝^ニ告^グ今^ノ償^ハ事^ヲ既^ニ畢^ス何^レ甚^ク理^ニ非^ニ苦^ク受^ケト云^ク畢^ス走^リ出^ス

〔今昔 卷九〕

更に、次に示す例は同一の文脈・説話内に出現するものではないが、この三例の関係を見ても、文の種類や動作・状態の主体或は表現主体などによる相違ではなく、文の断続関係が優先的な基準であると理解せざるを得ない使い分けのあることが確認できる。

○真^{マコト}頼^{ヨリ}老^シ臨^ミ身^ミ病^シ有^リ既^ニ命^ヲ終^ス為^ル日^ノ弟^ト子^ト長^シ教^ヘ云^ク僧^ト呼^ビ寄^セ告^グ云^ク我^レ必^ズ今^ノ日^ニ死^ス而^{シテ}汝^ニ未^ダ受^ケ不^レ学^ブ金^ノ剛^ト印^ヲ契^リ真^ノ言^ヲ有^リ其^レ速^ク可^ク教^ヘト云^ク

〔今昔 卷一五〕

○境^{キョウ}妙^{ミョウ}言^フ吐^ク云^ク境^ノ妙^ト最^モ後^ト病^シ此^レ也^ト此^ノ度^ニ必^ズ死^ス云^ク沐^シ浴^シ淨^ク衣^ヲ着^ル

〔今昔 卷一五〕

○增^{ゾウ}祐^{ユウ}弟^ト子^ト呼^フ云^ク我^レ既^ニ死^ニ為^ル事^ヲ近^ク來^リ早^ク葬^ス具^ヲ可^ク儲^グ

〔今昔 卷一五〕

次に、ムズについて見ると下接語一覽から看取できる特徴的なことは、助動詞「ラム」が突出して多いことである。ムト為ラムが七例、ムトスラムが八例であるのに対して、ムズラムは六四例を数え、ムズの終止形七八例中の八割強がラムを下接していることになる。このムズラムは、純粹な地の文に用いられることがなく、「ムズラムト思」の型で思惟の内容を引用・説明する文(四〇例)か会話文(二四例、内「ムズラムト思」六例)に限って用いられる。また、六四例の総てが文末に位置するものであり、かつ係助詞の結び三三例(ゾ一例、ヤ二三例、カ一例、コソ八例)・疑問詞の結び一三例(何ニ、何カ、イカニ、イカガなど)として文末に位置していることが、その特徴と認められる。

○舎^{シャ}利^リ非^ヒ目^メ連^{レン}ナトノヒト^トタヒニ授^ケ記^シカ^ハフ^ラサ^リシ^カハイ^カム^アラムスラムトオモヒヤスラシヒトニカフ^レリケム授^ケ記^シ

〔法華百座聞書抄〕

○心^{ココロ}内^{ウチ}思^シ様^{サマ}我^レ祖^ソ財^ツ買^ハ為^ル隣^ト國^ニ遣^ハ錢^ヲ以^テ亀^ヲ買^テ止^ム祖^ノ何^レ腹^ヲ立^シ給^フ思^ハト

〔今昔 卷九〕

○書^{シヤ}生^{シヤ}母^{ハハ}云^ク略^ニ嫗^ニ共^ニ何^レ給^フ思^ハ被^レ殺^ス難^ク堪^ハ増^ス

悲^キ今^キ早^ク入^ル給^ヒ (略)

〔今昔 卷二九〕

○僧〔略〕然^レ法師^ノ候^ハ房^ニ賤^ク小法師^一人^ヲ外^ニ人^ト不^レ候^キ糸徒^ト
然^レ恠^ニ恠^シコソ^ハ思^フムス^ラト云^ヒ語^ト行^ク

〔今昔 卷一七〕

本来ラムは現在推量などの意味を担って機能していたものと思われるが、この期のムズラムでは既にムズとラムとの間に積極的な弁別はし難く、二語が一体化した情意的な推量の表現となつて見られる。この情意的表現という性質は、次に述べるように、実はムズが単独でも有している特性と考えられるので、ムズラムによる表現はムズの情意的な推量や疑惑などをラムによって強調する表現といふことができる。

ここで前に返って、文の断統の観点で見ると、ムズも文末に用いられるものが全体の八割近く(二二八例中の一七三例)を占め、言い納め機能を有した語といえる点で、ムトスとの連続性が認められる。但し、先の下接語一覧からも看取できるように、ムトスの方が単独で終止形で文末に位置したのと異なり、単独では連体形になり(二〇例)、多くは助動詞ラムや助詞ゾ・ニヤ・ニカ・ニコソ・カナ・カシ等を伴い、或は名詞・形式名詞を下接して体言化するなど、単純な終止にならない。更に、係助詞はムズの下接語として特徴的であるばかりでなく、ムズが係助詞の結びに位置することも多い。係助詞・疑問詞と関わって用いられるという特徴は、前述のムズラムでは特に顕著であるが、ムズの用いられた表現全体を見た場合も、

ムト為・ムトスに比して、高い割合を占めることが、次の表によって確認できる。特に、意志表現以外の文に用いられたムズが他の二者を圧倒している点が注目される。

○乞食「ナニワサヲシ給ハムスルソ」トムヘ「法花經講セムトスル也」トコタフ
〔三宝繪詞 中巻〕

○佛ノ實説キ給フヲ聞カ如クナル支度ヲハイカムセムスルト云ニ其ノ支度ヲシテ説キ給フナリ
〔光言句義釈聽集記〕

○隨求タラニナトヨミテオハシマサム某甲力門流ニテコソオハシマサムスレマ
〔却廢忘記〕

○祖ノ室マウテム「カムル事コソアレイカムセムスル若聞給ヒ事ヤアル」ト云
〔打聞集〕

○國王ノ宣「地獄ニ墮テ銅燃燼火ニ身ヲ被焼レ刀山火樹ニ身ヲ交ヘム時痛ク去ト云ヘムスル(略)不可痛ム」ト宣
〔今昔 卷五〕

○此ノ講ノ畢事今六月許ニ成程聖人「講畢ラム日死ナムスル」ト云ケル
〔今昔 卷一五〕

○男ノ思「我レ觀音ノ示現ニ依テ(略)生返テ我馬成布三段カ此馬ニ成ムスル」ト思
〔今昔 卷一六〕

○物ノ心少知者共ノ奇異シク態ヲ為ムスルカト思ヒケリ
〔今昔 卷一九〕

○殿此ヲ聞食委問給ハムスルカト思ニ何ノ思食ケルニカト問給事モ無シテ止レム
〔今昔 卷二三〕

○益无事ニ依身ヲ徒成カスルカト思ヘム
〔今昔 卷二七〕

○弟子ニテ有ケル此レ聞テ怖レ「老ノ浪ニ極キ恥見給ハムスル」御房カタト云テ

〔今昔 卷二八〕

○女一〔略〕此様ニ為ル事既ニ二度ニ成ニタリ此ヨリ後キ亦レ此イコソハ候ハムスレ

〔今昔 卷二九〕

(略)ト云テ

○暫許有レ同様ナル人十余人許出来リ船ノ人「我等ヲ殺テムスル也ケリ」

〔今昔 卷三一〕

以上のことからムズの性質を考えると、ムズは、単なる意志や推量を表すのではなく、上に係助詞や疑問詞などを伴い、或は下に終助詞や係助詞などを伴うような、非平叙の情意性の強い表現文に与ることを特徴として、他の語とはその表現価値を異にしていたのではないかと考えられるのである。

むすびに

ここまでの考察で指摘し得たことを基に、推論も交えながら、ムトスとムズの表現性に関するを中心に簡単にまとめてむすびとし、卑見に対する大方のご批評を仰ぐことにしたい。ただし、本稿では、ムトスとムズの表現性を普遍的に論じ得た訳ではなく、はじめに断つたように、飽くまでも「院政・鎌倉時代」の「和漢混雑文」における場合の特徴として指摘できる表現性について卑見を述べたものである。和文に用いられる国語助動詞「むとす」「むず」の場合同も全く同一の性格のものとして捉えてよいかどうかは改めて検討

係助詞・疑問詞の結びに関わるもの

	意 志	そ の 他	
ムト為	ゾ(1) ナム(1) ヤ(3) カ(2) イドコニカ(1) 何(46) 誰(3) 10.5%	ヤ(1) 何テカ(1) 何(5) 誰(カハ) (2) 1.7%	全体の 12.2% (66/540)
ムトス	ゾ(1) 何カニカ(1) 何(2) 0.8%	カ(1) コソ(1) ナニムカ(1) 0.6%	全体の 1.4% (7/474)
ムズ	ゾ(1) コソ(1) イカム(1) 何(8) 4.8%	ソ(3) ヤ(ハ) (24) カ(ハ) (2) コソ(12) イカム(2) 何(22) 争(1) 誰(1) 29.4%	全体の 34.2% (78/228)

せねばならないが、本質的には通ずるものと考えられる。

ムトスとムズの表現性で最も基本にあるのは、その意味が意志であれ推量であれ、〈他者に属すること〉と把握されるものの表現、或は他者が意識された〈対他〉的表現に用いられるという性格である。従って、「意志表現」に用いられる場合は、表現主体以外（他者）の意志や意志に基づく動作を描写するための語として機能することが第一義的用法といえる。しかし、相対的には少ないが、表現主体自身の意志に関わる表現に用いられる場合もある。その場合、表現主体自身の意志そのものや意志に基づく動作が、他者に向けられたり働きかけられたり、或は他者への訴え・問いかけであったり説明であつたりするような表現に用いられることを特徴とする。即ち、表現主体自身のことも他者との関係で把握し表現しようとする〈対他〉的な意志表現に与る点を、ムトスとムズが共通に有する特異な表現性として位置づけることができる。

このムトスとムズに共通する表現性は、両者が動詞「ス」の意義を根底に未だ残していることの現れであると考えられる。機能拡大した動詞「ス」が形骸化しながらも、外に現れる動作（特に意志に基づく動作）を描写するという他者性・対他性、或は文末で陳述を担うなどの点でその機能を僅かに残すことよって、その部分で他の推量の助動詞「ム」などの表現とは異質な表現価値を持っていたのではなからうか。

因みに、ムトスとムズとの変遷について推論を述べるならば、ムズは既に一語助動詞として機能しており、ムトスも亦、動詞「ス」が動作性を弱めて漸次一語化（助動詞化）して行くが、それはまず文末に於いて陳述を担うことよって助動詞化するところから始まったと考えられる。その過程の一端が、本稿で指摘し得た事象の中に窺える。即ち、院政・鎌倉時代の和漢混淆文におけるムトス・ムズは、文末に位置し、発言の末尾で表現主体の思想・感情や意見・判断などを結論的に述べる、いわば言い納め機能を有する点を、基本的な特徴として認めることができるのである。

以上は、ムトスとムズとの共通性（連続性）を認められる部分であるが、一方では両者の相違を認めることもできる。ムトスと比較した場合、ムズの方は、単なる意志や推量を表すのではなく、情性の強い非平叙の表現文に用いられる性格のものといえらるるのである。¹³それは、両者が共通に持つ〈対他〉性を、一語化を更に進めたムズの方がより強く發揮しているためであると考えることができ（これは、ムズのズが濁音であるという、音の強さが関係していると見ることもできようか。）換言すれば、ムトスもムズも〈他者に属すること〉の表現或は〈対他〉的な表現に与る語と位置づけられるが、ムトスが他者に属することを他者のこととして（場合によつては自らのことさえも）客観的に捉えた叙事性の対他的表現になることを特徴とするのに対して、ムズは他者のことでも幾分自分

の側に引きつけ、表現主体の感情や判断を交えた叙情性の対他的表現になることを特徴とすると言えそうである。斯る点で、ムズは特徴的表現性を明確にし、他の推量の助動詞とは異なる表現価値を持つて存在したものと考えられる。

最後に、特にムズに関して、その最も本質的な表現性を他者を意識した〈対他〉的表現という点に認める立場は、これまでに諸先学によってムズの特徴として指摘されてきたことと矛盾するものではなく、諸先学の指摘と本稿での指摘とは緊密に関連し得るものであることを確認しておきたい。尚、先学の高論を極簡単に整理すると、次のようにまとめられる。¹⁴ムトスとの対比から指摘された点は、和文(系資料)・会話文・口(頭)語調の文に用いられる語であること、心理的描述・自然的状態的表現に関与すること、確信をもっての推量を表すことなどであった。また、その他にムズの特質として、作者の主観的立場の表現・切迫した事態の推量・主観的推量・強い意志・ベシの持つ表現との類似性などが指摘されてきた。

▽ 〈対他〉的表現は、表現主体と対者(聞き手)とで構成する場において、それぞれの立場が意識的に明確にされた表現であるといえる。その場とは主に会話(対話)の世界であり、そこに用いられるような対他性を特徴付ける語であれば、当然会話・談話・口頭語調の文に偏在するという傾向が顕著に表出することになる。ムズの特徴として指摘されてきた口頭語性は、正にそれが対他性

の強い表現であることを物語っている。

▽ 会話(対話)の世界では、表現主体(会話主)がその責任において断り言い納める表現が多くなると考えられる。一方、発言の末尾で結論的に述べる言い納め機能を有することが、ムズの特性の一つとして指摘できる。つまり、そういうムズの特性と会話の世界の表現の特性とは密接に関係するものであることが認められる。

▽ 更に、表現主体の責任において断り言い納めるということは、表現主体の思想・感情・判断に基づいて表現することであるから、その表現は情意的主観的表現になり易い。このことは、論理的骨組みになることの多い(或はそれを要求する)地の文の表現には、ムズがあまり用いられない(相応しくない語)ということにも通ずる。

▽ その情意性・主観性の高じた表現は、強調・詠嘆の表現と見ることができ。また、対他的に情意や主観に基づいて表現する非平叙文に用いられることを、ムズの特徴として捉えることも可能であった。つまり、ムズの最も基本的な特質である対他性と言いなめ機能とが会話文末で発揮され、情意性(叙情性)を強めたものが強調・詠嘆のような非平叙の表現文であり、そのような表現に与る点に、ムズの特徴的表現価値が存したものと考えられる。疑問詞や係助詞・終助詞などと併に用いられる比率の高さは、そ

ういう一面が象徴的に表出したものと見られる。

▽ 以上のようなムズの特性があるからこそ、推量表現ならば主観的推量或は確信をもった推量、意志表現ならば強い意志を表すとされ、地の文に用いられた場合は、作者の主観的立場の表現で、心理的・情意的表現であると捉えられることになるものと考えられる。

▽ ムズについてベシの持つ表現との類似性が指摘されることもある。本稿で問題にした対他性という観点からも、両者間に類似性が認められるように思う。特に意志表現についてみた場合、ベシの意志表現は、ムズそれに比して、対他性を強く持つ点を特徴とするという主旨のことを以前論じたことがある。¹⁵⁾

▽ ムズは和文資料に多く用いられる。ことから本位にその伝達を主とし、叙述における論理の一貫をめざした訓読文に少ないのに対して、聞き手への語りかけを心がけるといふ聞き手本位の「かな散文」(和文)に多く用いられるのである。このことも、ムズの情意性や対他性という特徴の一面を象徴していると解釈できるのかもしれない。

注

(1) 吉田金彦「今昔物語集における推量語「むず」「むとす」の用法」(『訓点語と訓点資料』19、昭和三十六年一月)・同「中古・近古における推量語

「むず」「むとす」の用法」(『国語と国文学』39・3、昭和三十七年三月)・同「むず」(んず)の成立」(『国語国文』31・8、昭和三十七年八月)・小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」(『広島大学文学部紀要』3、昭和四十六年三月)・同「鎌倉時代の口頭語の研究資料について」(『鎌倉時代語研究』11、昭和六三年五月)・関一雄「平安和文における推量辞「むず」と物語用語「むとす」」(一)・(二)(山口大学「文学会志」41、平成二年二月)・山口国文 14、平成三年五月)・菅原範夫「延慶本平家物語の「ムズ」小考」(『鎌倉時代語研究』14、平成三年一〇月)

(2) 本稿で調査対象とした資料は次の通りである。

今昔物語集(東京大学国語研究室資料叢書『今昔物語集 一―六』(汲古書院)、但し未刊・欠巻部分については、日本古典文学大系『今昔物語集』(岩波書店)・打聞集(東辻保和『打聞集の研究と総索引』(清文堂))・法華百座聞書抄(小林芳規『法華百座聞書抄総索引』(武蔵野書院))・三教指帰注(築島裕・小林芳規『中山法華経寺藏本三教指帰注総索引及び研究』(武蔵野書院))・明恵上人夢記(高山寺資料叢書『明恵上人資料第二』(東京大学出版会))・却庵忘記(同上)・光言句義釈聴集記(同上)・三宝絵詞(日本古典文学影印叢刊『三宝絵詞 明恵上人伝』(貴重本刊行会))
(3) 関一雄「平安和文における推量辞「むず」と物語用語「むとす」」(一)・(二)(山口大学『文学会志』41、平成二年二月)・山口国文 14、平成三年五月)

(4) 和文語と漢文訓読語という位相差が語彙のレベルで認められることは、従来着目され、その性格が論じられてきた。単に語形対立(類義語の二形対立)だけでなく、その位相差は語法上の対立関係もあることが指摘されているが、自立語(例えば副詞の如き)に限られているように思われる。論者は、付属語においても同一語の語法的対立が認められることを、これ

までに論じてきた。そこでは、和漢混消文においては、付属語の意味・用

法が和文におけるものほど複雑ではなく、その語のより本質的な部分が現れ易いことを指摘した。ムズとムトスについてもそういう観点でながめて、その差異を明らかにし得るのではないかと考える。

- (5)注(1)論文、並びに以下の論文。山内洋一郎「助動詞「うず」について—連体形終止の異例として—」(広島大学文学部紀要)23—3、昭和三年八月)、蛙谷清人「助動詞「う」「うず」「うずる」の語形・用法に関する一考察—狂言古本を中心に—」(『国語学』86、昭和四六年九月)、山田深「推量の助動詞「う」「うず」「うずる」の一考察—キリシタン資料における実体—」(『学芸国語国文学』7、昭和四七年一月)、安達隆一「天草版平家物語の「ウ・ウズ・ウズル」について(一)—いわゆる原拠本との比較を通してみた—」(『解釈』、昭和四七年二月)、追野虔徳「ウズ」について(『文学研究』87、平成二年三月)、山田深「助動詞「ウズ」の表現性」(『国語国文』60・6、平成三年六月)、菅原範夫「「うず」の消滅過程」(『小林秀規博士追悼記全国語学論集』汲古書院、平成四年三月)。
- (6)以下、「むすび」の前までの本論中で、括弧付きの「ムトス」を用いることがある。ムト為とムトスとの表記の区別を問題にしない(ムト為・ムトスの両方を意味する)場合、或は従来のように所謂(一語相当の)助動詞として扱う場合は、「ムトス」と表記した。但し、「はじめに」「むすびに」においてはこの限りではない。
- (7)拙稿「『今昔物語集』における「ムトス」「ムト為」「ムガ為」——「為」との関係から——」(『鎌倉時代語研究』18、平成七年)で論じたことに基づく。
- (8)命令形については、ムト為・ムトスが助動詞「ム」を承けた上での行為を表現したものである為に、出現しないものと考えられる。「む」が推量や意志といった未確認・非現実のことなどを表すものである為に、その内容が命令の形で表現されることはないのである。

(9)文中用法では「ムト為ルニ」の形になるものが最も多く(一九九例)、後句に対して情況・目的や原因・理由を説明する為に用いられた表現型である。この形は、意味や構文的性格・表現性という点で、「ムムガ為ニ」や漢字「為」との関係が深いものと考えられるが、そのことについては既に拙稿(注(7)論文)で論じた。

(10)この点に関しては、拙稿(注(7)論文)でも述べた。ここでは、文の断続関係に関してのみ改めて確認しておきたい。

(11)ムト為が普通に言い納め機能を有していたと認識されていれば、「ム得、為、其、時、」とされる方が語法上の無理が無い。しかし、少なくとも「其、時、」を承ける「ムト為(終止形)」の例は他にも無く、その意味を表すのには「ムト為ル時ニ」や「ムト為(ル)ニ」などが用いられる。意味上全く同じであるにも拘わらず、ムト為に「ムト為、其、時、」は無く、一方、ムトスに「ムトスルニ」が殆ど無い。注(7)拙稿参照。

(12)話し手の立場の直接表現で、かつ「詞」を統一する機能を持つことが「辞」の性質であるとする見方で言えば、表現主体の思想・感情を反映する語としての文末のムトス・ムズは、極めて辞的性格の強い語であると見ることがができる。

(13)前注と同じ見方で言うと、ムズがムトスよりも辞的性格が強かったことの流れであると考えられる。ムトスに比して、動詞「ス」の影響から解放された割合の高い一語助動詞として機能することによって、ムトスなどの意味・用法との差異を明確にし、ムズが独自性を持ったのであろう。話し手の立場の直接表現で、思想・感情を反映する語であり、特にその情意性を強くする語として機能したからこそ、ムやムトスなどの他の推量の助動詞とは異なる表現価値を持って存したのではないだろうか。

(14)注(1)・(5)に掲げた高論の中から、本稿と関係するところを中心に

(15) これも對他性の強さから導かれる一つの特徴と考えられる。特に会話文においては、対者や第三者に行為やその影響が及ぶ意志として表明するものであるから、強い意志とか確実性が高いとか言うことになる。

(16) 拙稿「中世和漢混濁文における助動詞「む」・「べし」について——〈意志〉の意味・用法を中心に——」(『鎌倉時代語研究』12、平成元年)。意志表現における「べし」の一つの特徴として、言語主体が自分自身の意志を、相手を眼前にして直接に表明する(口頭の会話文という形をとることが多い)場合に専ら用いられるものであることを指摘した。言語主体が他者の意志を間接的に述べる場合には、専ら「む」が用いられることと対照的である。即ち、「む」に比して、「べし」の意志表現は對他性を強く持っている点に特徴があるといえる。

〔付記〕

本稿は、平成七年度鎌倉時代語研究会夏期研究集会において口頭発表した内容を基に成稿したものである。また、對他性・他者性や文の断続との関係という観点については、平成五年・六年の同研究会での口頭発表でも、その主旨を部分的に述べてきたものである。

—— たなか・まさかず、兵庫教育大学助教授 ——